

第17回「ことば」フォーラム

方言の科学－ことばのくにざかい 富山－

2003年11月3日（月）

富山国際会議場

大西 拓一郎（国立国語研究所）

中井 精一（富山大学）

真田 信治（大阪大学）

相本 芳彦（北日本放送）

共催：富山市教育委員会

後援：北日本新聞社，北日本放送

協力：富山市立図書館，富山大学人文学部中井研究室

独立行政法人 国立国語研究所

【あいさつ・趣旨説明】

司会（山田） 皆様，こんにちは。国立国語研究所の山田と申します。お席をどうぞお譲り合いになってお座りください。さっそく始めさせていただきます。最初に国立国語研究所理事^{にら}菫澤から御挨拶^{あいさつ}を申し上げます。

菫澤 皆様，こんにちは。私，ただいま御紹介いただきましたように，国立国語研究所菫澤と申します。国語研究所を代表いたしまして，一言御挨拶を申し上げたいと思います。本日は大変お忙しいところを，多数の方にお集まりいただきまして，まことにありがとうございます。心から感謝を申し上げたいと思います。この「ことば」フォーラムは，国語について国民の意識を高めるとともに，国語研究所の日本語研究の最新の成果を広く公表するという趣旨で始められたものでございまして，今回で17回目を迎えます。今回は方言をテーマとして取り上げております。御承知のように我が国は，面積は小さいんですけども，東西南北，かなりの広がりを持っておりまして，全国各地に様々な方言がございます。そして，この方言については，近年は地域の文化として大変重要なものというふう^にに位置づけられているわけでございます。富山は日本のほぼ中央にございまして，この方言の東西の境界線に近いところにあるということで知られております。この富山で方言についてのフォーラムを開くということは，大変意義の深いことだと思っている次第でございます。今回のフォーラムでは，まず，全国から見た富山の方言の特徴，それから，県内の地域のいろいろな差，そして，特定の地域についての歴史的な推移といったように，いわば鳥の目から虫の目にといった観点で富山の方言に接近することにいたしております。このフォーラムにつきましては，お忙しいところをおいでいただきまして御講演くださる大阪大学の真田先生，そして，富山大学の中井先生に対しまして，心から感謝を申し上げたいと思います。また，この富山は，国語学の泰斗であり，文化勲章も受賞されました山田孝雄^{よしお}博士の御出身地でもございます。このフォーラムの運営に御協力いただいた富山市立図書館には山田孝雄文庫が設けられていると聞いております。国学に縁の深いこの地で方言に関するフォーラムを開催できたことを大変うれしく思う次第でございます。さて，ここで一つ，私どもの国立国語研究所について触れさせていただきたいと思います。私どもの国立国語研究所は，日本語に関する総合的な研究機関として昭和23年に設立されまして，今年で55年目を迎えます。この間，日本語に関する様々な研究活動を積み重ねてまいりました。方言についての大規模な実地調査に基づく研究は世界の方言研究をリードしております。また，日本語の語彙^{ごい}について，これを意味体系による分類をしたもの，あるいは漢字使用の計量的な研究，こういったものは，ワープロとか，あるいは自動翻訳システムの基礎となって，我々の言語生活を一変させたわけでございます。また，現在は話し言葉についての世界最高のデータベースの構築を進めておりまして，これは次世代の音声認識，あるいは要約システムといったようなものについての新しい世界を切り開くというふう^にに期待されております。このようなものにつきましては，今皆様の資料に入ってお

ります「国語研の窓」という小冊子に書いてございますので、後でお読みいただければと思っております。また、平成13年には、国の直轄機関から独立行政法人というものに移行いたしまして、より自主的、自律的な運営ができるようになりました。今後、日本語についての最先端の研究をさらに進めるとともに、国民の皆様に対するサービスを一層向上させていきたいと思っております。これにつきましては、言葉についての様々な問題を分かりやすく解説した「ことば」シリーズの刊行、あるいは言葉に関する電話相談といったようなこともやっておりますので、ぜひこの研究所を活用願えれば幸いです。本日は文化の日ということでございます。国語が文化の基礎であるということは言うまでもないわけでございますが、方言もまた文化の重要な要素というふうに我々は考えております。ぜひこの方言についてのお話を楽しんでいただければと思っております。最後になりましたけれども、このフォーラムの開催に御尽力いただきました富山市教育委員会、北日本新聞社、北日本放送、富山市立図書館、富山大学の皆様方に対しまして改めて感謝を申し上げます。簡単でございますが、御挨拶とさせていただきます。ありがとうございました。

司会 続きまして、今回この「ことば」フォーラムを共催していただきました教育委員会様からということで、富山市立図書館の館長さんに御挨拶をいただきます。どうぞよろしく願いいたします。

杉田 こんにちは。雪化粧の立山連峰と色づいた街路樹のコントラストが一段と映える季節となっております。本日ここに第17回「ことば」フォーラムが、「方言の科学ーことばのくにざかい 富山ー」と題して、国立国語研究所の御尽力によりまして、当地富山の国際会議場大手町フォーラムにおいて盛大に開催されることになりましたのに対し、一言、御挨拶を申し上げます。平素、皆さん方には富山市立図書館の活動に格別の御尽力をいただいておりますこと、この席をお借りして改めてお礼を申し上げたいと思います。今回の国立国語研究所が主催いたします、この「ことば」フォーラムには、富山市教育委員会が共催というかたちで参画をさせてもらっております。当館の山田孝雄文庫の受け入れ、整理作業を、ただいま進行司会をされておられます国立国語研究所の山田先生に御指導いただいております。先生の取り持つ縁で今回のフォーラムが富山で開催され、私どもが参画をさせていただくということになりました。幸いに新聞各紙、また、ラジオ、テレビほか、富山市広報、あるいはインターネットなどを通じまして参加者を募集しましたところ、大変に多数の皆様のお応募をいただきまして、共催者としても面目をほどこすことができました。本当にありがとうございます。今ほど主催者の理事さんの御挨拶にもございましたとおり、「ことば」フォーラムは年間を通じて全国で数カ所、開催されておられます。これまで日本語そのものや、あるいはコミュニケーションといったことがテーマになっているとお伺いしております。テーマそのものに、今の場合ですと富山という地名が出てくるのは初めてというふうにもお伺いしてお

ります。今回は方言の宝庫と言われております当富山で、また、国語学の権威であった山田孝雄博士の出身地であります富山で開催される運びとなりましたことは、大変に喜ばしいと思っております。私どもは普段、方言ということ意識せずに日常会話をいたしておりますが、一たび県外に出てまいりますと、それまで自分が使っておりました言葉が方言であるということに気づくわけございまして、そのことによってちょっと恥ずかしい思いをしたりすることもございます。しかしながら、誇りを持って、方言ということ意識せずに、全国どこへ行っても使っておられる方もおられるのではないかと思います。いずれにいたしましても、本日のフォーラムの中でも触れられることと思っておりますが、日本各地に残る方言は、歴史と地域の文化によりはぐくまれてきたものでございます。本日は全国的な視野からも、また、科学的な視点からも、私たちの富山弁を解き明かしていただき、改めて方言について考えてみたいと思っております。終わりになりましたが、北日本新聞社ならびに北日本放送には後援というかたちで様々な御協力をいただいております。後援各社にはこの場をお借りしまして改めてお礼を申し上げたいと思っております。まことに簡単ではございますが、本フォーラムの実り多い成果を御祈念申し上げます。御挨拶に代えさせていただきます。本日はどうもありがとうございました。

司会 ありがとうございます。それでは、お待ちかねの中身に入らせていただきます。

今日は生放送をお休みなさって駆けつけてくださいました、もうご存じの北日本放送の相本さんを御紹介いたします。これからは相本さんの司会でやっていただきます。どうぞお願いします。

司会（相本）これまたなんちゅうでかいと来られた。ねえ。あのねえ、大体こういうイベントですと 200～ 300 人入れば上等なんですよ。400 人以上やと。富山弁好きけん。嫌いけん。嫌いじゃない。嫌いやったら、ここに来んちゃね。好きな人、はい。ありがとうございます、ほんとに。私も富山に生まれて、富山に育って、富山に帰ってくるもんかと思ひながら富山に帰ってきて、今じゃもう富山弁が似合うアナウンサー。こんなアナウンサーおらんと思ひますけれども、なっってしまった。一つ、改めて御紹介したい方がおられるがです。今ここで司会をしておられました山田さん。さっきから図書館に山田孝雄文庫いうてあって、それから、蕪澤理事からも文化勲章をかつてもらった方で、富山ゆかりの方でというのをずっと言うてあった。その方、国立国語研究所の山田主任研究員の御世話で今回富山で開催する運びとなった。山田孝雄文庫いうて、で、いま山田研究員いうて紹介されて、なんか関係あるがじゃなかろうかと思われた方はおられませんか。山田さん、ちょっとだけそこで立ってください。お孫さんです。昭和 32 年に文化勲章を受賞されて、そのあと富山の名誉市民になられました山田孝雄先生のお孫さんがこちらの山田さんでございます。ちなみに、多分本人に言うて嫌がられたり、恥ずかしがられたりしますが、お父さんも国語学者で、もとの成城大学の学長さ

んまで務められたという、もう国語学一筋の家系のようでございます。文化勲章をもらうて富山名誉市民になったがは、田中耕一さんだけではないということやっちゃ。田いう字はつながってますけどもね。それでは皆さん、いくつかお願いがあります。アンケート用紙に後で答えてください。今答えとったら講演聞けなくなりますんで、後で答えてください。それから、特にもう一つ、小さな紙があります。「ことば」フォーラムの質問票。ぜひ方言に関すること、また、今日これからいろいろと3人の先生方が話をされますので、それに対して、分からんだことがある、おらはこんなこと聞きたいがやというようなことがありましたら、これに御記入ください。で、緑色の名札をつけた係員がおりますので、その人に渡してあげてください。そしたら、後で採用されるかもしれません。今日これだけたくさんおられますので、質問に多分答える時間もそれほどたくさんありませんが、後のパネルディスカッションの中でいくつかの質問には答えていこうと思っておりますので、ぜひ御協力よろしく願いいたします。さあ、それではお待ちいたしました。まずは第1部、3人の先生方の講演です。国立国語研究所の大西拓一郎主任研究員の「方言の東西境界と富山」というタイトルでお話をいただきます。他局の番組でございますが、「トリビアの泉」というのが大変人気がありまして、へえボタンをたくさん押すという人も出てくると思います。今日もへえと感心することがいくつもあるんじゃないかと思えます。大西さん、どうぞよろしく願いいたします。

「方言の東西境界と富山」大西 拓一郎 (配布資料 : p. 1 ~ 8)

大西 ただいま紹介いただきました国立国語研究所の大西です。今日は「ことば」フォーラムの中で「方言の科学—ことばのくにざかい 富山—」ということで話をさせていただきましたが、順番としまして、私のほうは全国から見たときの富山の位置づけというようなことで、「方言の東西境界と富山」という題でお話をさせていただきます。全国の方言が東と西に分かれるということにつきましては、皆さんも漠然とご存じの方もいらっしゃるかと思います。具体的にどんなふうに地図にしてみると描かれるか。それをお見せしたいと思えます。この地図は、「書かない」、あるいは「読まない」、または「見ない」というときの、その「ない」のところをどのように言うかというものの全国地図を描いてみたものです。この地図で分かりますように、東日本には広く水色の記号のナイというものがある。つまり、「(書か) ない」です。それに対しまして西日本には広く赤色の記号のンというかたち。つまり、「(書か) ん」とか、「(読ま) ん」、「(見) ん」といったかたちです。こういったものが存在するということがお分かりになろうかと思えます。なお、以下、いろいろ地図をお見せしますけれども、基本的に我々の研究所のほうで作っております地図集からデータを利用しております。このように東と西に分かれるもの、こういったものを我々研究者の世界では東西対立というふうに呼んでおります。つまり、方言の分布が東と西に分かれるというようなものです。ただ、注意してお

きたいのは、実際にはどんな場合であってもこういうふうに分かれるわけではなくて、そういう様々な分布の中でも、一つの分布のパターンであるということ。ですから、どんな場合でも東西で方言が分かれるというものではありません。しかし、非常に重要な分布の様相であることは確かです。では、富山県から見たときに方言の東西対立というのはどういうふうに分けられるということですが、今示していますナイの地図で言いますと、境界線は富山とどういう関係になるかと言いますと、実際には西側のンというかたちです。「(書か)ん」とか、「(読ま)ん」のンです。これは新潟県側に入り込んでいるわけです。ですから、今回のフォーラムは「ことばのくにざかい 富山」というふうに銘打っているんですが、実はちょっと誇張した表現で、なるべくお客さんに来てもらおうかなというところもあったことはあったんですが、ちょっとひっくり返ったりしていますけれども、しかし、確かに境界線に非常に近いところに富山があるということは間違いありません。さて、今ナイの地図をお見せしましたけれども、東西対立はそのほかの地図でも見ていくことができます。まずは割と単純なタイプから見ていききたいと思います。ここに示しました地図は、花びらが一面に散り敷かれている状態を指してどのように言うか。東日本では広くこのことを「(散っ)ている」というふうに言うわけです。一方、西日本には、この地図で分かりますように茶色の記号が広く広がっています。これは「(散っ)ておる」、テオルのかたちです。トルというかたちになったりもしますけれども、それが分布していることが分かるかと思えます。この地図は「高くない」というときの「高く」をどのように言うか。東日本には広く青色の記号が広がっています。これはタカクというかたち。それに対しまして西日本には広く赤色の記号、タコーというかたちです。「高くない」のタコーです。これが分布していることが分かります。品物を買ったというときの「買った」をどのように言うか。東日本には広く青色のカッタがある。それに対しまして西日本には広くコータというかたちが分布しております。以上を通しまして、一つ、この東西対立の特徴が見えてきます。それは何かと言いますと、非常に境界線がはっきりしている。明瞭であるということです。全国の基本的なかたちが二種類ですから、はっきりするのは当たり前じゃないかというふうに思われるかもしれませんが、その二つのかたちが入り交じるかたちで分布するのではなくて、いわば水と油のようにはっきりと分布が分かれる。これが一つの特徴であるということが分かってきます。更に東西対立にかかわる地図を見ていききたいと思います。もう少し複雑なものをこれから先お見せしたいと思えます。ここに示しました地図は、「あれを見ろ」と命令するときの「見ろ」、これをどのように言うかです。東日本には広く緑色のミロが分布しています。それに対しまして西日本には赤色のミヨ、あるいはミイといったかたちが分布しています。「手紙を出した」というときの「出した」をどのように言うか。東日本には広く青色のダシタが分布しています。それに対しまして西は少し複雑なんですけれども、基本的にダイタというかたち、これが分布して

います。「静かだ」というときの「だ」をどのように言うかというのがこの地図の注目点です。東日本は広く茶色のシズカダ、ダです。それに対しまして西日本は先ほどと同じように少し複雑なんですけれども、基本的にはカズカヤ、あるいはシズカジャといったかたちが分布しております。以上の何枚かの地図、ここからもう一つの特徴が見えてきます。それは何かと言いますと、境界線の位置が非常によく似ているということです。大まかに地名で言いますと、新潟県の糸魚川の辺りから静岡県浜名湖にかけての辺りに境界線が存在する。このことは別の見方をしますと、日本アルプスにどうやら近いんじゃないかということが推測されるわけです。さて、また富山県に視点を移しましょう。富山県から見たときに、では、境界線はどのようにとらえられるか。特徴が三つの観点から見られます。一つは、西のかたちが新潟県側に伸びているもの、もう一つは、新潟と富山の県境にほぼ一致するもの、もう一つは、富山県内を境界線が走っているものです。西のかたちが新潟県側へ伸びるものとしましては、冒頭に挙げました「(書か) ない」。この場合、西のンというかたちが新潟県側にぐっと伸びているわけです。「高くない」のタコーというのも同じように新潟県側へ伸びています。県境にほぼ一致するものとしましては、「買った」をカッタと言うか、コートと言うか。また、「見ろ」というのをミロと言うか、ミヨと言うか。それから、富山県内を境界線が走るものとしましては、「出した」というのがダシタなのか、ダイタなのか。富山県内がその二つのかたちが混ざっています。また、「静かだ」というのを、ダというのとヤというのが混ざっているということが分かってきます。今見てきましたように、境界線の位置というのが県境とどういう関係にあるのかというのが大体これで分かってきたかと思います。しかし、先ほど申し上げましたアルプスとどうも関係があるんじゃないか。アルプスの関係というのは、ここまで示してきた地図では、いまひとつはっきりしないかと思います。そこで、今度は境界線に焦点を当てて、ここを拡大して見てみる。そのときに山並みとの関係が分かりやすくなるようなかたちでとらえてみたい。そうすると、山並みとの関係を見たいわけですから、今までは方言の分布のデータというものを基本に見てきたわけなんですけれども、それと標高のデータを重ね合わせてみよう。標高と重ね合わせることによって、東西対立と日本アルプスとの関係というものが見えてくるだろう。これを検討してみたいというふうに考えます。具体的にはこのような地図が描けます。これは最初から出てきました「(書か) ない」のナイです。東日本に水色のナイがあって、西日本にンというかたちがある。それと山並みとの関係が見えてきました。「ている」なんですけれども、「散っている」。東日本には広くある水色のテイル、そして、西日本のテオル、それと山並みとの関係が見えています。「高く (ない)」の場合のタカクです。東日本の水色のタカク、それと西日本のタコー、それとアルプスの山々との関係。「買った」と言うときの東日本の水色のカッタ、それと、赤色のコート、これと山並みとの関係。「あれを見ろ」と言うときの、ミロと言うのか、それともミヨ、あるいはミーといったかた

ちを使うのか、それと高い山々との関係。「出した」と言うときの、ダシタなのか、それとも西のダイタなのか。それと山との関係。「静かだ」と言うときの東日本のダのかたち、それと西日本のヤ、あるいはジャとアルプスとの関係がこのような地図を描くことによって見えてくるわけです。結論から言いますと、どうやらこの境界線というのは日本アルプスの谷間を走っているらしいということが見えてきます。何枚かの地図を並べてみますとこんなかたちになります。データを重ね合わせて、画像を処理したかたちでお見せしますとこんなかたちになります。これで分かりますように、アルプスとの関係で言いますと、北アルプス、飛騨山脈の東側をどうやら境界線が走っている。これは別の言葉で言い換えますと、JRの大糸線が走っている谷間、この辺りまでが東日本の方言が存在している。また、伊那谷といわれる谷です。これは木曾山脈と赤石山脈、もう少し分かりやすい名前で見ると、中央アルプスと南アルプス、その間にはさまれた谷間に境界線が走っている。つまり、この谷間の辺りまでが東日本の方言で、そして、そこから西側の中央アルプス、また、北アルプスから西側が西日本の方言、このようなかたちで境界線が引ける。つまり、日本アルプスの谷間に境界線が走っているということが見えてくるわけです。富山県にまた視点を移しますと、富山県と境界線との関係でいうと、境界線が少し西側にずれると富山県内を境界線が走るということになってくるわけです。今境界線がずれるということを申し上げましたが、この境界線は確かに項目によってのずれがあります。しかし、それもランダムにずれるわけではなくて、どうも一定の傾向が見えてきます。そのときの傾向というものの一つとしては、境界線からずれる場合には、基本的には海岸線に沿うということが見えてきます。日本海側で見ると、「(書か)ない」で見ても分かりますように、そのずれは日本海の沿岸に沿うようなかたちで東側にずれこんでいるわけです。右側の「高く(ない)」であっても同じようなことが言えます。また、太平洋側であっても同じようなことで、「(書か)ない」のンという西のかたちは、やはり太平洋の沿岸に沿いながら東側にずれる。「見ろ」のミヨというような西のかたちもやはり同じようなことが言えます。「出した」であっても同じようなことが言える。では、内陸のほうはどうなのか。内陸でずれを起こす場合には、内陸が単独で東側にずれるということではなくて、むしろ内陸でずれを起こす場合には、沿岸部でのずれに連続するようなかたちでずれを起こしている。この地図で見ると、沿岸部で東側にずれているわけですがけれども、ここから更に伊那谷に入り込むようなかたち、あるいはここから連続して甲府盆地に入り込むようなかたち、このようなかたちで沿岸部から連続してずれ込んでいるということが分かるわけです。以上、大まかに東西対立の様子を見てきました。東西対立に関しては、もう一つの視点から扱うことができます。それは時の流れとどういう関係があるのかということです。実は日本の言葉が東と西で違うということについては、かなり古い時代からそれがあつたことは分かっていました。かなり古いというのは上代です。『万葉集』の中に「東歌」、ある

いは「防人歌」といったものが存在します。この中には当時の中央の言葉とは違う言葉で書かれた歌が含まれています。当時の東日本の言葉で書かれた歌が含まれています。そこから当時から東と西で言葉の違いが存在するということは意識されていたということが分かるわけです。しかしながら、これらの資料では境界線がどこかというところまではまだよく分かりません。時代が大幅に下りまして、明治時代、今から 100 年前になりますけれども、文部省に国語調査委員会というものがつくられて、そこで『口語法分布図』という地図が出されます。その地図集の一つの結論としまして、仮に全国を東と西に分けるならば、大まかに言って、越中、飛騨、美濃、三河、その東側の境界に境界線が引かれるんだということが述べられています。どんな地図かといいますと、100 年前の言語地図ですけれども、このような地図です。左側は冒頭から出てきていたのと同じ言葉を扱っていますが、ナイに当たる地図です。右側はミロに当たる地図です。せっかく 100 年前の地図があるわけですから、現在我々のほうで編集している地図と並べて見てみよう。そうしますと、このようになりまして、左側が 100 年前の地図、右側が現在の地図です。境界線に注目してみますと、驚くほどよく似ているということが分かるわけです。つまり、100 年たっても余り境界線の位置は変わらないということです。また、ミロであっても同じようなことで、やはり 100 年前と境界線の位置に余り違いがない。境界線が余り動かないということは今になって分かったことではありません。実はこのちょうど中間的な年代、100 年の間の 50 年に当たるころですが、そこで一人のアマチュアの方言研究者の方がこのことに気づいて論文を書いておられます。非常に有名な論文なんですけれども、それは長野県の諏訪に在住でいらっしゃった牛山初男さんという方。その方が一人でこつこつと境界線付近を調査されて、そして、論文にされたものです。大変な苦勞があったのではないかと思いますけれども、今まで示した地図というのは国家規模でやっていますから、かなり人手もかけて地図を作ってきたわけですから、牛山さんは一人でこつこつと調査されたことによって、そのことを結論づけられました。大変苦勞された様子につきましては、今日、会場にもいらっしゃっていると伺っていますけれども、信州大学で長くきょうべん教鞭をとられました馬瀬良雄先生が、ここに挙げていますような著書の中でもそのことについて触れられております。御関心があれば、図書館で借りられるなり、また、最近出た本ですから、まだ入手できると思いますので、お買い求めになってお読みになってはどうでしょうか。ということで、境界線が余り変わらないということは、実は 50 年前から気づかれていて、更に今現在調べてみても、やはり同じようなことが言えるわけです。そこで、東西対立というものにはもう一つ特徴がある。それは何かと言いますと、境界線の位置が余り変わらない、境界線が維持されるということが一つの特徴になってくるわけです。今特徴 3 と書きましたけれども、特徴の 1 と 2 は何だったかな。もう忘れてしまいそうなので、ちょっと復習しますと、一つは、非常に境界線が明瞭りょうである。二つ目は、境界線の位置が、項目によっ

てずれはあるけれども、非常によく似ている。三つ目は、境界線の位置が時間の流れに余り左右されないで保持される。これだけの特徴があるということは、方言の分布の類型として非常に大規模な構造であって、重要な意味を持っているということが分かってくるわけです。ところが、そういう東西対立なんですけれども、いろいろ謎が多いのです。今申し上げましたように、東西対立というのは大規模な構造としてとらえられるんですけれども、どうして東西対立が存在するのか、それについてはまだよく分かっていません。ここに挙げましたような論文。これは比較的図書館などでも入手しやすいものだろうと思いましたので、挙げておきました。しかし、説はまだ定説になっているものではありません。では、なぜ説明するのが難しいのかといいますと、一般的な分布の説明方法というものをこの分布の模様というのには寄せつけないんです。一般的な説明方法というのはどういうものかといいますと、簡単に言いますと、一つは「周圏論」と呼ばれるものです。「周圏論」というのは周辺部が古いという見方をするんですけれども、方言の分布ができあがるにあたっては、中央があって、中央から言葉がだんだん拡散していく。広がっていく。しかし、中央、これは日本語で言いますと、歴史的な、長く中央の地位を持つのは京都なんですけれども、京都のほうもいつまでも同じ言葉を使っているわけではなくて、変化するわけです。そうすると、京都は新しい言葉を使っている、周辺部は京都の古い言葉を使う。そのことによって分布の違いができあがるという考え方です。もう一つは、「逆周圏論」とも呼ばれますけれども、周辺部が新しいというものです。言語の変化というものには一定の法則や方向性というものが存在します。そのことによって自然な変化を起こすのです。ところが、言語的な中心部というところは言語的に保守的な性格を持っていて、なかなか変化を起こさない。そのことによって、周辺部は自然な変化を起こしているのだけれども、中央部のほうは保守的なかたちを残している。そのことによって分布の違いが発生する。この二つの考え方というのは決して対立する考えではなくて、分布を説明するときに、それぞれ活用しながら、両方を利用しながら使っていけばいいというような考え方です。しかしながら、東西対立というのはこういった考え方を寄せつけない分布模様なわけです。ですから、この東西対立をいかにして科学的に明らかにしていくか、そういう説明の方法もつくりあげていく。そういうことが現在も方言学にとって大きな課題になっています。しかし、これは非常に大規模な構造である。しかも歴史的に長いものが背景にあるらしいということが分かっています、これを解明していくことは非常に大きなロマンを感じさせる。そういう研究になっていくものと思われまます。以上、「方言の東西対立境界と富山」ということで、全国的に見たときの富山の位置づけということについてお話をいたしました。私の話はこの辺で終わりにしまして、続きまして富山大学の中井先生のほうから、今度は富山方言に焦点を当てて、「富山方言の地域差」ということで話を伺いたいと思います。どうもありがとうございました。

司会 大変分かりやすかったのではないかと思います、分からなかったところがある方、また、逆に興味を持ったという方は、ぜひ質問票に御記入ください。全部答えられるわけではございませんが、一部は答えていただけるんじゃないかと思います。それにしましても、50年前まで変わらないというのは何となく理解できるんですよ。でも、50年前から現代に至るまで、東西の境目が歴然と残ったままというのにびっくりしません？なんでかいうたら、我々テレビとかラジオの人間にとっては、テレビ、ラジオがこの50年間というのは強烈に普及したわけですよ。日本中、はっきり言って標準語が分からん人はおらんようになったわけですが、にもかかわらず、東西対立はまだああやって歴然としてラインが残っているというのは、これは不思議な気がするんですがね。皆さんどうお考えかは、また後の質問票を楽しみに見ることにいたしましょう。それでは、続きまして地元富山大学人文学部の中井精一助教授。今日は学生の皆さんも外のホワイエのほうで研究成果をパソコンで発表しておられましたが、そちらもまた、よかったら、後の休憩時間にご覧になってください。「富山方言の地域差」について御講演いただきます。よろしくどうぞ。

「富山方言の地域差」中井 精一

(配布資料 : p. 9 ~ 14)

中井 どうもこんにちは。今日は「富山方言の地域差」ということでお話させていただくのですが、いつも私の話を聞いていただいている方もいらっしゃるし、また、富山県の方言の研究をされている方々なんかもいらっしゃるの、ちょっと緊張しながら、お話しさせていただくことになると思います。それと、ちょっと風邪を引きまして、いつもの私の美声を聞いていただけないのが残念でございますが、声が続く限りお話ししたいと思っております。まず、はじめに、資料のほうを御覧いただきながらお話を聞いていただきたいと思っております。今大西さんのほうで話をさせていただきましたけれども、富山県の方言を考える場合は、日本の方言を西と東に分けた場合に、富山県はある種西側の防人の位置にあるような境界地帯にあって、いつも東側の方言と接触しているわけです。だから、それだけ方言に対して皆さんが敏感で、よその地域ではなかなか考えられないぐらい方言に対する意識が高い地域として知られております。資料にも書きましたように、私は6年前に富山大学に来ましたが当初は、驚くことばかりでした。一番驚きましたのは、道を東のほうを向いてまっすぐ走って行ったら、いつの間にか南のほうに向いているとか、曲がる場所を一つ間違えて、まあ、次曲がればいいたろうというようなことで曲がりますと、もう全然違うところに行くというようなことがあった。道路というのは縦横十文字、東西南北に切つてあるというのが私の生まれ育った奈良では当たり前だったので、方言研究者として、地図を見て、全国どこへ行っても道に迷うことがないと自信をもっておったことが大きな間違いで、自分の育ったところがたまたま分かりやすいところだったのだということがよく分かったわけです。それで、とにかく道に

迷いながらも、地図を持って、県内のいろいろなところへ行きました。富山県の方言を考えるに当たって、実際に調査をしてみないと分からないのだからとにかくいろいろな人に、聞いてみようということで、調査の項目を作って、学生と一緒に回り始めて今も県内を回っておるわけです。多分ここに来られている皆さん方の中にも、私たちの大学の研究室の調査をお手伝いいただいた方がいらっしゃるんじゃないかと思います。私は富山県の方言を、ここに挙げましたように、まず、三つに考えております。一つは、富山県西側の方言ですが、これが一体何なのかと考えますと、西側の方言は多分関西の影響を受けた方言だと思っております。西の方言はイコール関西の言葉なんだと。もう一つはどうも関西方言の影響をあまり受けないものがある。このあまり受けないものというのは二種類に分かれるだろうと思っております。一つは、新潟とか長野などとの関連のあるもの、もう一つは、そういったところとも関係のない、より小さな範囲での方言というふうに考えております。大きく分けまして、関西の言葉をダイレクトに受けたものと、受けないもの、受けないものの中には、長野や新潟と非常に広範囲で分布するものと富山独自のものというふうに考えているわけです。以上で私の話の大筋は終わりといえば終わりなんです。けれども、そうもいきませんので、私や私の研究室がかかわった調査などを基に少し具体的にお話をしましょう。私の研究室は都竹通年雄という非常に有名な方言の研究者が二十数年前にいらっしゃって、その次が川本栄一郎先生です。川本栄一郎先生とは不思議なご縁で、ここにいらっしゃる真田先生の恩師にあたる方です。川本先生の後に齊藤孝滋先生がいらっしゃってそのあとが、私というふうになります。皆さんフィールド派の方言研究者ばかりですけれども、たくさんの研究の成果がありまして、そういったものをもう一度見直してみたいということもあって、今日は私の調査の結果以外に、川本先生の資料なども見ていきたいと思っておりますのは川本先生と当時の学生さんなどが調査をなさった「ぶり」の成長段階の名前に注目した地図になります。レジュメにも書きましたように、「ぶり」は出世することで有名な魚です。学生ともよく言うんですけども、「ぶり」は海を泳いでいるだけで出世できてええなあ。人間は一生懸命頑張らないとなかなか出世はできないわけですけども、「ぶり」は海を泳いでいるだけで順番に上がっていく。なかなか結構な魚やなあというふうに言っているわけですけども。この「ぶり」の出世の段階が富山の場合は非常に細かく出世していくわけです。課長さんから部長さんになって、部長さんから社長さんになるんでしょうか。何段階にも分かれるわけです。それはやはり海に近くて、それだけ細かい視点でものを見ているということになるわけですね。私の生まれ育った奈良県には海がありませんので、「ぶり」は平社員のハマチからすぐ社長のブリになるわけです。ハマチの段階からブリの段階に至るあいだの魚も全く見たことがないのです。富山に来まして初めて「ぶり」の小さいのを見ました。この「ぶり」の幼魚ですが、フクラギとか、フクラギよりもっと小さいツバイソとかコズラクといった小さな「ぶり」

の子どもも、ちゃんと「ぶり」の顔をしているわけです。びっくりしました。所変われば品変わるといいますが、地域が変われば、本当に見るものがないものを見ることができ、その未知のものにも細かな名称がついていることに不思議を感じました。私の実家のほうでは「ぶり」の食べ方は切り身しかありません。切ってどうするのかというと焼いて食べるだけしかありません。こちらへ来ますと、おいしい刺し身から始まって、煮て食べる場合もあるんですね。いろいろな食べ方がありますがけれども、私のところでは焼き魚でしか食べることができないわけです。本当においしいおいしい「ぶり」ですが、川本先生の地図を御覧いただきますと、「ぶり」というのは大きく成長段階の数と、段階による名前のつけ方が富山県の西と東で大きく2種類に分かれるだろうということが分かっております。県の東のほう、大体富山市から東のほうにかけてというふうに言えばいいんじゃないでしょうか。「ツバイソ・フクラギ・チューモン・ブリ」というようなかたちで大体4段階です。西部のほうに行きますと、「コズラク・フクラギ・ガンド・ブリ」の4段階です。もちろん4段階の間にもう一つ何かが入ったりすることによって、4ないし5というふうになりますが、今日お見えの真田先生のお生まれになった地域、五箇山のほうになりますと、段階が2ないし3というふうになってまいります。つまり、名称と段階名というのが、富山県の東と西、呉東と呉西による違いと、海岸部と内陸部による違い、「ぶり」の成長段階名を見ますと、はっきりと富山県内の方言の特色が見えてくると思います。川本先生の御研究は非常に分かりやすい御研究だと思います。富山県は先ほど言いましたように西日本の方言圏に入っておりますので、こういうふうになりますが、これが東のほうにまいりますと、「ぶり」の持つ意味がまた変わってくるわけです。ここにも書きましたように、出世する魚ということ以外にも、お正月に食べる魚、年取り魚ということで、西側は正月にこの魚がないと始まらない。富山県では娘さんをお嫁さんに出して、なお年末に嫁ぎ先に「ぶり」まで持っていくらしいですね。私の生まれた奈良では、お嫁さんをもらいますと、もらったうちが「ぶり」を届けます。つまり、私がもしも富山の女性をもらったらどうなったのかと、私の家からも「ぶり」を持っていきますし、向こうからも「ぶり」を持ってきてくれて、年末年始は「ぶり」三昧の幸せな正月になるわけです。私が奈良県の人間でなければ、嫁さんももらえて、「ぶり」ももらえたという、大もうけだったと思うんですけども、奈良はなんと男のほうは「ぶり」を持っていくということで、所変われば品変わるといって、えらい損したな、富山の人と一緒になればよかったと思いました。「ぶり」というのは年取り魚ということもあって、民俗的な研究をする視点からも重要な意味を持つわけですね。今から3年ぐらい前に、富山県の言語動態地図というのを学生と作成いたしました。画面に入っていると思います。従来、富山県というのは呉東と呉西あるいは五箇山といった地域に区分することが日常的によく知られているところです。ただ、私は呉東と呉西というものを区切る呉羽山、あんなもん越えんのん何が大変なんやとずっ

と思っておりました。すぐ越えられますね。もちろん高いところもありますが、あれが境界になっているというのはけったいな話や、変な話やなあと思っておりました。いろいろ調べましたけれども、昔の人はよう言うたもんで、やっぱり呉東と呉西の差は割とはっきりあるんですね。見た目では自然の障害にならない低い低い山なんですけれども。先ほどの大西さんの話は言葉の伝播経路は谷筋というのが重要であるということでしたが、日本全国に目を配りますと中部山岳地のような 3000 メートル級の山が障害になったり、その間を縫う谷筋が経路になるという理屈はよく分かります。けれども、呉羽山が自然の障害になるとは誰も思わないわけです。つまり、大西さんの話は物理的な境界というふうにとらえていいと思うんです。呉羽山というのは、そういう物理的な境界ではなくて、心の中につくる壁だというふうに思う。その壁が県の西側の世界と東側の世界を分けている。方言の分布を見ても、やはり富山県は西側と東側で分かれるものが当然多いわけなんですけれども、最近では県の中心の富山市が前景的な中心になって、そこを核にしながら、都市部の富山市と周辺の方言の違いなんかを見せるようになってきていることが分かってまいりました。つまり、呉東、呉西という大きな県の西、東の分かれ方以外に、富山市という大きな都市が一つの方言を区切る、また、区画する大きな柱になっているということです。大西さんの話も私の話もここまでは地理的な分布というものを見たわけなんですけれども、こちらに挙げましたのは、2年ぐらい前に、富山県内で1回 2000 人ぐらいの人にいろいろ聞いてみたらどうやということ、とにかくたくさんの人に聞こう。たくさんの人に、今富山県の方言がどうなっているかというのを聞いてみましょうということ、調べた結果です。富山県の方言を西と東を分けるときは、「味が濃い」のをどう言うか、もしくは「塩辛い」のをどう言うかといった点に注目して、カライとか、東部ではショッパイ、中央部ではショッカライといった地域差があった。福井から北陸全域にひろがるクドイといった特徴から、よく使われている項目ですけども、反対に薄いのはどうなのかというのを聞いてみました。「塩味が足りない」ないしは「味が薄い」のをどう言うかというのですが、西のほうに行けば行くほどウスイと言う方が増えてまいります。県の東の人はどう言っているんだろうかと見ますと、東のほうへ行きますと、ショムナイという言い方でたくさん出てきます。ウスイという言い方は西日本、特に関西を中心として広がってきている言い方なんです。そのように考えますと、富山県の西、東を分けているものの大きな要素は、実は西日本の方言をより多く受け入れているか、受け入れていないか、西日本の方言をたくさん受け入れる地域が県の西のほうで、東は余り受け入れていないあるいは受け入れが遅いのではないかというふうな考えに至りました。以上申しましたように、富山県の中で細かく見ますと、海岸部と内陸部の相違、また、西と東の相違があって、関西の方言をより多く、より色濃く入れる地域が西側の方言の特徴を形作っているというようなことも分かってまいりました。時間の関係もありますので、最後に一つ。これは最近作りました富山県音声

言語地図です。今日、こちらに来ている学生が、一生懸命頑張ってくれましてできました。真田先生にもいろいろ教えていただいたり、今日、会場にお見えの金沢大学の新田先生なんかにも教えていただきながら、本当にこの音がいいのかとか、いろいろな試行錯誤を繰り返しながら作りました。今ホームページでアップしておりますのでダウンロードしていただいて、それは間違いだというものがあれば、ぜひ教えていただきたいと思います。いくつか音を聞いてください。例えばアイウエオというのを富山の人たちが伝統的にどういうふうに言うのか。もちろんアイウエオはアイウエオなんですけれども、いくつかの特徴的な発声を確認できましたので、聞いていただきます。

<音声>

私にはアエウイオと聞こえるんですけど、おじいさんは何回も聞きなおしましたが、「アイウエオを言ってください」と言ったら、アエウイオとおっしゃいましたので、きっと間違っておられないと思います。

<音声>

これは普通ですね。

<音声>

これはアエウエオと私には聞こえましたが、「アイウエオと言ってください」と言ってみると、録音をとっていきまると、いわゆる共通語のアイウエオとは違うような発声かたちでの発声を確認できます。最近ではこういう方法で方言の資料を集めて地図化していくということが重要になってくると思います。以上、時間になりましたので、まとめますと、富山県というのは県の東部と西部、いわゆる呉東と呉西の地域差があります。これは有名なところですが、新たに富山市を中心とした都市部と周辺部の方言差が明確になってきていますし、海岸部と内陸部の地域差ということもはっきりしております。以上を見ていきますと、日本の西と東の文化が交錯する地域だということは確かに言えると思います。また、語彙なんかで見ますと方言のバリエーションの豊かな、豊かすぎて調査するのに困るぐらい豊かな土地だと言うことができると思います。大西さんの話もそうだったんですけども、方言というのは変わりそうで、なかなか変わらないものが多い。彼は東西対立について言いましたけれども、語法とか、文法とか音声に関係するようなことというのはなかなか変わりにくいというのはどうも確かなようです。富山県でこんなに豊かな方言のバリエーションがある。豊かというのは、それぞれの言葉で多様な価値観と豊かな文化が存在することを示すのではないかと思います。富山県は三世同居で、おばあちゃん、おじいちゃんが孫に方言を伝えていくという方言伝承のシステムがしっかりできている地域だと思うんです。そう考えますと、富山県のこの豊かな方言というのはこれからも維持されていくのではないかと考えました。どうもありがとうございました。

司会 どうもありがとうございました。富山大学の中井先生でございました。私のやって

いるラジオの番組をお聞きの方だとお分かりになるかもしれませんが、富山県の道路交通情報センターの男性の方で、イ段の音が全部エ段の音になる方がいらっしゃるんです。よくラジオを聞いていた方からクレームが来るんですけども、今のでなんか謎が分かったような気がしました。細入村の楡原^{にれ}というところを言わなければいけないのに、ずっとネレハラ、ネレハラとおっしゃるんですよ。それから、まず、呼びかけますと、ハイじゃないんですよ。ハエ、と返事されるんですよ。きっとアイウエオじゃなくて、アエウエオのほうなんだろうと今、意を強くいたしました。あつ、イを強くしても言えないだろうね、きっとこの方はね。エを強くしたとおっしゃるんでしょうね。関係ない話で申し訳ございませんでした。さあ、いよいよ講演最後でございます。五箇山は上平の御出身でございます。お母さんは真田ふみさんでございましたよね。五箇山の方言地図もお書きになって、私も大変参考にさせていただいた方でございます。大阪大学大学院の真田信治先生です。今日は「社会構造と方言、その変遷」についてお話をいただきます。よろしくお願いいたします。

「社会構造と方言、その変遷」真田 信治 (配布資料 : p. 15~18)

真田 御紹介いただきました真田でございます。先ほどの大西さん、中井さん、お二人とも関西弁で通していらっしゃいます。私は卑怯^{きょう}者で富山弁を隠しておりますが、ただ、いつぞや東京の大学で講義をしました折に、富山県出身の学生が、先生はひょっとして呉西の出身ではないですかと言ったので、隠しきれないなと思ったことがございます。特に動詞のアクセントは全く隠しきれないのです。さて、お二人のお話から、富山の方言の分布をめぐって、種々の様相が紹介されました。私たちの方言、その土地ごとの方言の表現法と言いますか、その方法は私たちの先祖のものの考え方とか感じ方を基盤として、その結果として生まれ発達してきたものだとは思いますが、しかし、一方で注意したいのは、ひとたびそういう表現法という社会的習慣ができあがってしまうと、これを習うと言いますか、習得する場合には、逆にその表現法自体が習得者の考え方や感じ方を規定することにもなるという点です。私がここで今日お話しするのは、ふるさと五箇山の親族名称のありようについてでありますけれども、私自身は伝統的なありようを必ずしも次代に受け継ぐべき正統なものだと考えているわけではありません。そもそも古いものをすべてよしとする立場は問題なわけで、特に社会的な排除や差別に関わるようなものは、反面教師として記録に残すことは必要ですけども、それは保守すべきものではなくて、当然消えるべき、あるいは消滅させるべき対象だとも考えているのです。日本において近世まで個人という概念は存在しませんでした。明治になって英語からの individual という概念に遭遇したとき、日本人は迷いに迷って、「一個人」、「一個人」という訳語を当てました。それがのちに「個人」という語形で定着するわけですけども、当時の日本人にとって、個人主義、個性、あるいは人権といった概念は存在し

なかったと言っても過言ではないと思います。それまでそれぞれの人間は社会的組織の中における一つのステータスを担うものにすぎなかったというふうに言ってもいいかと思います。そのことを具体的に表象しているものが北陸の伝統的な親族名称だというふうに考えます。五箇山で言いますと、親族名称は個人を中心としてではなく、私のお父さんとか私のお母さんということではなくて、個人の属する家を中心として系統化されているのです。「私の家の～」「あそこの家の～」という文脈での、～に代入できる。もちろんこれは皆様ご存じだと思いますけれども、例えば、お父さんが「私のお父さん」ではなくて、五箇山弁で言いますと、「おらちがトーチャン」ということになります。また、「あこのトーチャン」「あこのカーサン」。これも「あの人の」という個人を軸とした言い回しではなくて、「あそこの家」の家長、戸主であるという言い回しになります。ですから、例えば、「西のトーチャン、東のトーチャン、北のトーチャン」などと言えるわけですね。これなど、他地域の人たちからは、たくさんお父さんを持っているんですね、と皮肉を言われるのですけれども、我々はそのような表現が当たり前だと思っていますので、これもやっぱり北陸的な特徴だということですね。それは、あくまで家の中での地位を表すものなのであって、そこに家自体のステータスも表現されているのです。このことがレジュメに書きました兄弟姉妹を表す言語記号が存在していないということにもかかわるわけです。「私のお兄さん」とか「私の妹」とかいう言葉が、これは五箇山だけではありません、富山県の西南部一帯がそうだと思いますが、表す言葉がなかったということです。もっとも性の別を言い分けるときには、「オトコキョーダイ」とか「メロキョーダイ」とか言うわけですが、見たら男性か女性かは分かるわけで、「こりオラがシタじゃ」と言えば、即、弟か妹かが分かる、そういう表現にしかならなかったのです。なぜそういうことになるかといいますと、やはりアニとかアネという言葉が兄弟姉妹における兄や姉ではなくて、家を継ぐべき長男、長女であり、それを表すということです。それはやはり家の中でのステータスとしてのものです。「私の～」ではないわけです。そこらへんが先ほど申しましたように、社会構造がそのまま言葉に反映しているということになるわけです。なお。特に近代には、各地の村落での人口がほぼ飽和状態に達したために、多くの村落では戸数の増加が制限されたのです。ですから、次男とか三男は分家もできず、婿養子になるか、村を出ていかない限り、オジボーなどと呼ばれて独り暮らしを強いられたり、生涯やっかい者扱いされたりする例が多くありました。このような状況は、家の中における長男と次男以下の者の地位の差をますます大きいものにしたのです。戦前の旧家などでは、長男だけが特に大切に育てられて、次男以下は従属者のように差別的に扱われることが多かったのです。もちろんこのことは私が差別されていたから言うわけではありません。私は長男ですから、逆に強く言える立場にあると思うのです。レジュメの表1ですが、これは五箇山のある集落で、各家の戸主と主婦が、戦前において地域社会内部でどのように言及されていたかを調べた

結果です。表の中に示した等差とは、それぞれの家の封建的な家格によって支えられてきた、かつての、いわば階級レッテルのことです。1が最高で、6までの6ランクになっております。A家の戸主と主婦が「ダンナサン」「オクサン」なのは、彼らが、村に一人しかいなかった医者であり、その妻であったからです。どちらの形式も最も敬意度の高いものです。それから、MとQは、Fと同じく、Bにつながる分家です。どちらも当主が亡くなって母子世帯になったために、かつての等差が下がったのです。等差は基本的には動かないのですけれども、部分的にはこのように動く場合もあったようです。「トツァ」「カーカ」はFと同じです。このMとQを除けば、ほかの戸主の名称は等差のランクとほぼ対応しているわけです。等差が地域社会内部における各家の社会的階層を表象して、その階層性に応じて各語形が使い分けられている、と言えるわけです。一方、主婦については、A家の「オクサン」、B家の「オカカ」を除いて、「カーカ」が多く、等差、すなわち社会的階層との間の使い分けがあまり認められません。「オカカ」は「オトト」に対応する敬意度の高いものです。このようにさまざまなバリエーションがありますから、平野部ではまたちょっと微妙なバラエティがあるかと思えますけれども、五箇山の場合はこういうかたちで表現形式がいわゆる階級レッテルと対になっているということがありました。もちろん、先ほど言いましたように、これは戦前のことであります。そういう体系が時代、時代でどのように変化してきたかということを追跡しているわけですが、表2は、上平村立尋常高等小学校に1935年、昭和10年度に在籍していた生徒たちを現在において追跡した結果です。彼らが当時、子どもの頃において、自分のお父さん、お母さん、おじいさん、おばあさんをどのように呼んでいたかということ記録したものです。表では敬意度の高い形式の順番に並べてあります。この時代には、呼称と名称、すなわち言及する場合と直接呼びかける場合との区別がなかったということがまず指摘できます。それから、やはり、例えば「父」に関しては、「父」と言いましても、やはりこれは家族内地位称ですから、お父さんというよりも戸主ということですが、オトト／トツァ／トート／トー／トトという段階です。「母」に関しては、オカカ／オッカ／（ジャー）／カーカ／カー／ンバの6段階があります。こんなかたちで表現形式が家柄と対応しながら、社会的階層を表していたのです。それから、おじいさん、おばあさんのところがなぜか空白になっていますね。おじちゃん、おばあちゃんがいなかった。なぜか。この世代の人たちには、自分の親の代に自分の家が分家したと報告をする人が非常に多いのです。その親の代の頃といえば、1910年代あたり、まさに第一次世界大戦の前後です。これは多分、当時いわゆる家の戸主になると兵役が免除された、徴用の免除があった、だから、分家をして戸主になれば兵役を忌避できるという、私は民衆の抵抗の一つではなかったかと思うのです。そういう時代状況がここに表れているのではないかなと思います。そして、表3ですが、これは上平村立上平中学校に1965年、昭和40年度に在籍していた生徒21名に面接して、彼らがやは

り子どものころ、自分の家族をどう呼んでいたかということ調べた結果です。明らかに変化が起きております。それは、家の社会的ステータスに対応した形式のバラエティが全く消えている。一つの形式に統合、一律化しているということです。トーチャン、カーチャン、ジーチャン、バーチャンというかたちで、全く画一化しているのです。ある話者によりますと、この等差をなくすという解放運動、あるいはこの変革は、いわゆる戦後民主主義の思潮のもとに意識的に行われたそうです。表によってそのことが確認できるかと思いますが、一人の話者を除いて全員が、先ほど言いました新しい表現、トーチャン、カーチャンというかたちで呼んでおります。このトーチャン、カーチャンという形式の発生は、^{となみ}砺波平野部のほうが少し早いのです。10年ぐらい早いのですが、五箇山には少し遅れて入ってきた。そして、そのかたちで戦後定着した。これも非常におもしろいのですけれども、まさに皆が一緒という戦後民主主義の象徴的なパターンを言葉によって具現化したものといえるのではないかと思うのです。そういう一律化、いわば民主化なのでしょうが、それがさらに後にどうなったかということです。最後の表4です。これは上平中学校に1995年、平成7年度に在籍していた生徒たち全員を対象として、やはり彼らが家で家族をどう呼んでいたかということ調べた結果です。表では結果を男女別に配列しました。それから、呼称と名称と分けて表示しましたが、それは、直接呼びかける場合と話題にする場合とで表現が変わってきたからです。標準日本語の場合がまさにそうなのですけれども、チチとかハハとかいう表現は言及のときにしか出てこないものです。そういうことがありますので、ここでは、呼称と名称とを分けて掲げたわけです。指摘される点は、かつての新表現であったトーチャンとカーチャンが衰退しつつあることです。その上にオトーサン、オカーサンがかぶさってきている。これはまさに標準日本語化であると言えるかと思います。しかも、その運用は、戦後の皆が一緒という時代ではなくて、非常に個別的な、個々別々なものに変化している。家ごとに異なっている。これは、新しい個人主義と言えれば大げさかもしれませんが、そういうものに変化しているということが言えるんじゃないかと思うのです。それから、特に興味深いのは、言及する場合において、旧形式、かつての新表現なのですが、トーチャン、カーチャンを第三者として言及する場合だけに使っている人が何人か存在するという事です。すなわち、ここには、間接的な言及においてのみ地域社会の旧形式が残存するといった事象が見られるわけです。なお、ジーチャン、バーチャンという「チャン」のかたちが、「祖父」「祖母」という、おじいさん、おばあさんのところに多く出てくるということもございます。「父」「母」は、共通語ではオトーサン、オカーサンと「サン」ですけれども、その上になりますとオジーチャン、オバーチャンと「チャン」なわけです。そこから「オ」さえを取ればジーチャン、バーチャンになるわけで、ここにはちょっとそういったことが関与しているかなとも思いました。それからもう一つ、留意したいのは、この世代、13歳、14歳、15歳あたりですと、例えば先生にお母さん

のことを紹介する場合においても、オトーサン、オカーサンとしか言っていない。チチ、ハハとはまだ言っていないです。このチチ、ハハというのはいつごろから言えるようになるかというのが非常に興味のあるところですが、この世代においては、ウチソトの区別と申しますか、その使い分け、弁別がまだ習得されていないということも注目すべき点かと思えます。ここまでいくつかの具体的事例を見ながらお話してきましたけれども、私が言いたいことは、やはり、方言あるいはその言語体系といったものが社会構造をもろに反映し、地域社会の人々の意識構造をももろに反映しているという局面です。そういう視座から方言を見ていくということ、私はやっているわけでございます。以上でございます。

司会 どうもありがとうございました。なるほど、ちゃんと対応するものがあるんですね。我々もテレビの番組で使わせてもらっているのが「オッカ、アンマおっか」「アンマおらねど、オッジャならおっじゃ」。富山の人なら大体分かっていただけるんですが、若い年齢の人になればなるほど、だんだん分からなくなるし、もっと難しかったのが、「カーカ、カー、カーカー」。これは1回、私、「カーカ」つまりうちのカカア、奥さん「カーカ」に、これはカ、ブーンと飛んでくる蚊かと聞いているんだというふうに訳したら、視聴者の方からお叱りのメッセージが届きました。それはブーンと飛んでくるカではない。農作業で使うクワだ。「カーカ、カー、カーカー」。聞いたんですよ、「じゃあ、あのブーンと飛んでくるのは何と言うんですか」「カ」。「では、農作業で使うクワは何と言うんですか」「カ」。最後まで私は聞き分けができませんでした。ちゃんとしゃべり分け、聞き分けができる方はどれだけおられるか分かりませんが、そういったことでも分からないことがあったら、どうぞ、この質問票に書いてください。パネルディスカッションでございますので、質問に答えるコーナーではないものですから、全部答えられるわけではないがですけれども、なんでも書いてください。これから20分休憩を取りますが、その時間の中に係の者に手渡してください。アンケートは、できれば全部終わってから渡していただければ幸いです。アンケートは全部終わってから、質問票は今のうちをお願いいたします。質問票は終わってから渡しても、何も答えられんもんですから、質問票は必ず今のうちに書いて、緑色の名札をつけた係の者に手渡してください。お願いいたします。それでは、20分間の休憩の間に、見るものもあれば、聞くものもあれば、出すものもあると思います。たくさんしなければいけないことがありますけれども、よろしく御協力お願いいたします。

<休憩>

【パネルディスカッション】

司会 休憩時間に質問をたくさんいただきました。これから今日答えておいたほうがいい

だろうというものにいくつか分類をさせていただきます、そして、今ここに至ったわけでございます。まず、今日は、改めてもう一回申し上げますけれども、これは質問コーナーに答える会ではございません。質問をとっかかりにしながら、三人の先生たちとパネルディスカッションをしていくコーナーですから、なんでおれの質問に答えてくれないんだと後で怒らないでください。残念ながら答える時間がない部分と、それから、今日のテーマにはそぐわないだろうなという部分があったというふうに御理解いただければと思います。といっても、とっかかりは質問からまいります。大山町の19歳の女性です。「今若い人たちが県外に進学、または就職して、いろんな地域の人と接する機会が多くなっているはずなのに、なぜ方言の境界線は依然として変わっていないのでしょうか」。これに並ぶように「東西方言の分布にアルプスなどの自然環境などの要因があると言われましたが、今は交通網も発達し、マスメディアも発達しています。こういったものにより、そういった影響は少ないと考えますが、そのほかの要因もあるのでしょうか」という質問が来ております。これは大西先生から答えていただくほうがいいと思います。では、お願いいたします。

大西 今回示しました地図なんですけれども、あれは実は100年の間隔というふうにして話をしましたが、ちょっとそががあります。調査はこれは20年前に終わっているんです。ですから、実際の間隔は80年なんです。しかも、どういう方から話を聞いたかという、20年前の65歳以上の全国のお年寄りなんです。ですから、今の感覚からするともう少し上の世代です。しかも、話し方としては、自分の友達に対して話す場合にどういふ言い方をしますかということで全国へ尋ねています。ということは、答えてくださった方ですね、その方は実際には別の言い方も持っている可能性があるんです。これは富山のほうもそうではないかと思うんですけれども、常に話をされるときに富山弁だけでどこでも同じ話の仕方をされるかという、恐らくそうではないという方がたくさんいらっしゃるんじゃないかと思うんです。場面によって使い分ける、切り分けるといふことがあると思うんです。今回示しました地図で言いますと、これはあくまでも伝統的な方言というところに焦点を当てて地図を作っています。ですから、かなり純粋の方言的なところで地図を描いているから、ああいうような境界線が描けるというところがあります。しかし、今現在調べても、恐らくそう変わらないんじゃないかなということがあるんです。それはやはり二面性を持っているわけです。ある場合には、つまり、本人の中には共通語と非常に類似した言語も習得していて、それと同時に、やはり伝統的な方言も持っている。そういうかたちで使い分けがされている。その中の純粋な方言的なものを聞き出すならば、やはり境界線があまり変わらないということは今現在も生きているんじゃないかな。これはまだ現在は推測の域は出ませんが、恐らくそうじゃないかなというふうに考えられるものです。よろしいでしょうか。

司会 我々、放送業界で言うんですけれども、関西弁がこれだけ全国で認知されるように

なったのは吉本の力が大きいんだとよく言うんですけども、そういうメディアとか、娯楽、芸能の部分というのは今後も影響を与えていくものなんですか。

大西 メディアの力というのはやっぱり大きいと思いますね。それ以前のところでは教育の力が大きかったと思うんです。教育の力というのは、すべて義務教育ですから、言葉について、これが共通語、標準的な言語ということで教育がなされてきたわけなんですけれども、しかし、メディアの力というのは実際に耳から入ってくる。それまでは書いたものを学校の先生が読んで教えてくれる。しかし、その教える先生というのは、実は地元の方なのであって、発音のすべてが必ずしも共通語の発音をされていたわけではない。しかし、テレビ、ラジオの力というのは、やっぱり実際に耳から入ってくる。しかも、一時間目、二時間目という区切りに関係ないですよ。一日中、言うたらあれですけども、テレビがずっとつけっ放しということはそんなに珍しいことではない。いや、むしろよくあることではないかと思うんですけども、ずっと、ある意味、言葉は悪いですけども、垂れ流し状態で影響を受ける。その力というのは、教育の力も大きかったと思いますけれども、メディアの力も非常に大きかったんじゃないかと思います。ぜひとも相本さんは方言を垂れ流しにさせていただけると、我々の研究材料もこれからも生き残っていくということになるんじゃないかと思いますので、ぜひ御協力、よろしくお願ひしたいと思います。

司会 実は富山県も西と東で方言が違うと言われてますし、実際、西と東に、それから、海側と山側で方言が違っているように見受けられます。私らが取材に行っても。それで、私がしゃべりますと、「おまえ、ほんまの富山のもんでなかろう」と言われるんですよ。なんでかという、富山県でいろんなところで取材しているもんだから、その土地の方言が混ざってきているんですね。そのせいで、おまえの富山弁はおかしいとまで言われるんですが、私、本来は県西部の高岡市というところの生まれ育ちなので、そこだけの方言でしゃべればいいんでしょうけど、そうすると富山の人に受け入れられにくかったり、海側の人に受け入れられにくかったりするもんだから、わざと混ぜてしゃべるんです。そうすると、おまえのは違うと言われるんですけど、そういう細かい中でもやっぱり多様性というのは当然出てくるんですよ。

大西 そうですね。ただ、ちょっと心配するのは、ここまで共通語的なものの影響を受けると、細かい地域差というのがどこまで生き残っていくかなというのはちょっと心配ではあるんです。つまり、東西境界のような、かなりはっきりと、くっきり全国二つぐらいのものしかないようなものであれば、これからも生き延びていく可能性は高いかなと思われるんですけども、しかし、どうでしょうか、もう少し細かな差異というもの、例えば富山県の呉東と呉西のようなものですね。私もよく理解していませんでしたけれども、ここには非常にはっきりとした自然的な境界はどうも存在しないらしいということが今日のお話を聞いて分かってきたんですけども、その辺、どうでしょう、中井さん。

中井 それは会場に来られている皆さん方がよくご存じだと思うんですけども、アルプスのような大きな自然の境界というものはなくて、それでなお西と東でうまく分かれるというのは、もとの地域それぞれの独立した暮らしがあったんじゃないかと思うんです。それと、富山市を中心とした地域が、これは御質問にも上がっていたんですけども、富山藩であるということ。かつて方言研究では旧藩域というんですか、例えば南部と伊達の境界で方言が違ふとか、南部と津軽の境界で方言が違ふというような藩での違ふも考えられます。方言研究者は地図を書いて線を引くのが大好きなんです。とにかく線を引きたい、地図を書きたいと思うんです。多分大西さんは日本中の地図を作りたいと思っていると思うんですが、私はとりあえず富山の細かい地図を作って線を引きたいと思うんです。その線を引く中では、やはり旧富山藩域というのは大きな意味を持つと思うんです。やっぱり呉東と呉西という、呉羽山はほとんど行き来するのに障害にならないですよ。呉羽山で遭難したというのは聞いたことがないですよ。遭難できないと思うんです。そういう遭難もできないような山で、そこが西と東に分けるランドマークになっているというのが面白いと思うんです。

大西 心の中のバリアみたいな。

中井 そうそう、心の中の壁。茶屋町の辺り、旧8号線の。あれ、歩いてもすぐ行けますよね。うちの学生も呉羽山の西側のカーマホームセンターに歩いていくなるとか、ダイエットのために呉羽駅まで歩いてますとか、言う学生がいるんですね。だから、それが自然の境界にはならない。そこにはやはり心のバリアというものがある。そういう心の部分を考えていくべきじゃないかと思います。

司会 だれが呉東と呉西と言いだしたかっていうのは私も知らないんですけども、なんでもかしたら言うんですよ。言った挙げ句に、皆やっぱり西と東は違ふよねって。文化的にも違ふし。それは確かにさっき言われた、富山藩と加賀藩の違ふもあるだろうし、言葉も違ったり、風習も違ったりするんだよねというふうに、いつの間にやら確かになってきているんですけどもね。

中井 あれはね、再生産していると思うんです。呉東と呉西は違ふんだというのがあって、なんとなく違ふんですよ。また、おばあちゃんは孫に言うんですね、違ふよってね。孫もああ、そうなんやと思ってね。皆再生産するので。違ふんだという前提で考え始めると、それが再生産されて、より固定化されていく。そういうものがあるんじゃないかと思いますけどね。

司会 高岡のMTさんという方からも、「他県にもこういう山をはさんで言い方が違ふような県があるんでしょうか。富山県は他県に比べて言葉の多様性は大きいんでしょうか」というような質問が来ているんですが、これは真田先生。

真田 さっきの話題に戻るんですけど、私は五箇山出身ですが、上平の方言を使っている人は1000人にも満たないわけですよ。したがって、外ではやっぱり切り換えなく

てはならない。だけど、たとえば関西の人は関西人がたくさんいるから、アイデンティティも強いから関西弁が使えるわけですよ。富山の場合の多様性の一つは、加賀藩と富山藩とのアイデンティティの差というふうにも思うんですね。呉西のものが朝日町など県の東端部にも分かれて分布しているわけですね。県の中央部で分布が断ち切られている。それは新しい富山藩のアイデンティティによるのではないかという気がしています。それから、富山県が他県と比べて特別……、山をはさんで、とおっしゃいましたか。

司会 例えば、さっきまでは北アルプスという大きなものが壁として。これは実際に大きな壁だったでしょうからね。

真田 今も言いましたが、やっぱりそれは近世の藩政がかなり影響していると思いますね。富山県の中で山をはさんでというと、それはやっぱり五箇山の特殊性についてということでしょうけれど、五箇山の場合ほどちらかというと飛騨のほうに近いと思いますね、文化としては。それはなぜかかというと、飛騨のほうと自然環境が似ているからです。ことばの多様性に自然現象が関わることは間違いないと思います。

司会 方言によって存在している部分と存在していないものがあるというのは、実は舞台裏でも話をしていたんですが、すみません、大西さんは分かりにくいかもしれませんが、富山弁だけの話になっちゃって申し訳ないんですけど、私は取材で回っていて、雪道を歩いていて、足がその中に沈み込んだ状態のことをゴボルと言われるのは県東部のほうばかりだと思うんですが、御理解いただけます？ ゴボルというのは。県西部のほうはゴボルというのはまず分からないと思うんですがね。呉西地区、県西部の方、ゴボルって言います？ 雪道を歩いていて、足が沈み込んだ状態。ゴボル。

真田 五箇山ではフンゴムと言いますね。

司会 フンゴム、五箇山だけなんですよ。五箇山から里に下りた城端、それから、一部砺波のほうはフンゴムとおっしゃいますが、あと、県西部の人はフンゴムもなければ、ゴボルもないんですよ、たしか。でも、富山県中、雪降るじゃないですか。県西部だけ雪降らなかったことはないはずなんですが、何でなんですかね、こういうのは。生まれたり消えたりとか、最初からなかったりするというのはね。

大西 すみません、県外の人間で、よく地理的な関係が分からないんですけども、基本的にどこかから分布。だから、伝播してきているような語形というようものではないんです。西から入ってきて、東のほうでゴボルというかたちが残存していて、その地域的な違いが出てきているとか、そういったものではないんですか。

真田 金沢はどうですか。

参加者1 ゴボル。

司会 金沢はゴボルですか。

真田 呉西では消えたわけですね。

司会 呉西が消えてるんですね、じゃあ。ほかに金沢の方はいらっしゃいますか。石川県

の方でもいいですよ。石川県出身の方でもいいです。おられない？ あっ、おられた。何て言います。

中井 ゴボルだって。

司会 ゴボル。石川県のどちらですか。金沢。お隣の男性は。あっ、女性だ。ごめんなさい（笑）。

参加者2 …？…。

司会 小杉町でもゴボル。生まれ育ちもゴボル。ゴボルじゃないや（笑）、小杉ですか。

参加者2 はあ、小杉ですけど。小さいときは小杉に。今は富山ですけれど。はい。生まれたところが小杉でして、ゴボルと言います。

司会 ゴボルと言った。

参加者2 言います。

司会 消えたんですかね、じゃあ。

真田 消えたんじゃないでしょうかね。

司会 いつ消えたかは、じゃあ、わかんないですね、そういうのは。

真田 それは、降雪量が少なくなってからでしょう。（笑）

大西 ぜひ中井研究室で調査してもらったらどうでしょうか。

中井 学生さんに頑張ってもらいましょう。

司会 言葉のそういう伝播の仕方というのは、かなり細かく調べておかないと、じゃあ、時代ごとに消えちゃうんですかね。

大西 地図を描くときにも、年代別に分けて地図を描くというやり方もありますので、その調査を行って、地図の描き方の手続きとしては、そういうやり方を取っていけば明らかにしていくことは可能です。

司会 ということは、そういうふうに細かくやっておかないと分からなくなっちゃうんですかね。

中井 年代差の調査というのは、一つはグロットグラムという方法があって、Aという地点と、例えば富山県だったら、朝日町と金沢ぐらいまでつないで、その線の間を世代ごとに、10代、20代、30代と70ぐらいまで取る方法なんかが一般的ですね。ただ、私の研究室で資料を探していましたら、10年ぐらい前に川本先生が県内で10代から80代までの調査をたくさんされているんです。そういう資料を表に出すことができれば、皆さん方によりくわしく富山のことが分かっていただけだと思いますけれどもね。

司会 これは小杉町の45歳の方なんですけど、「富山県の方言で語尾につくチャ、これは東西対立というのはありますか」というふうに質問が来ているんですけど、西と東にほかにもやっぱりチャがつくのがあるんですか。

真田 東西とおっしゃるのは富山県の中での東西でしょうか。もしそうだとすれば、本来、五箇山にはチャはなかったですね。最近入ってきて、本来はチャとワとは意味が違うん

ですけれど、五箇山ではワとチャを同じような意味として、ただ単なる強意の表現として使っているようにも思います。

司会 五箇山にはチャはなかったチャと。

真田 チャケー族ではなかったですね。平野部での～ケーなどのケーもなかった。

司会 チャというのは富山弁の代表選手のように言われているんですが、中井先生。

中井 それは県内は割と広く、平野部にはあると思うんですよね。富山方言で、今のチャもそうですけれども、県内は割と皆一律に使われているように思うんです。有名などころではラレですよ。ラレというのは本当に県内全部で使われているように思っていて。

司会 「食べラレ」とか。

中井 ええ、そうですよね。それで、全国的にも一つ、コピーに使っていますよね。富山方言のね。でも、この間朝日町とか入善のことを学生に教えてもらったら、ラレは私は高校へ行くまで知らなかったとか、使わなかったと言うんですよね。一つは、富山県のファーイーストですよ、極東、入善、朝日町はここでは中央部で使われるラレは使用しないと。それと思いきり西の氷見でも使う人もいるが使わない人も多いと聞きました。富山県の方言を考えると、どうしても呉東と呉西。呉東の代表は富山市周辺ですよ。呉西は高岡とか砺波を考えますけれど、実は西のほうには様々な方言の個別領域のようなものがあって、氷見というのは独特の方言域を形成していますよね。また、東では入善、朝日というのもおもしろくて、実は富山県全域で使用される方言と早合点しているものに、氷見では使わないとか、朝日、入善では使わないというものがけっこうたくさんあるんですよね。だから、そういうことを考えますと、その地域を重点的に調べるこの意味というのが出てくると思うんです。そんなふうにあります。

司会 今日、ちなみに生まれ育ちが富山県だという方、手を上げてみていただけますか。これだけいらっしゃいます。じゃあ、その中で県東部、いわゆる呉東だよというふうに言われる皆さんは。

真田 多いですね。

司会 はい、下ろしていただいて、呉西だよという方は。はい、ありがとうございます。いま手を上げていただいた皆さん共通で、うちは実はチャは使わんチャという方。はい。

真田 皆さん使うという方ですね。

司会 いや、何人か、でも、遠慮がてら、なんか頭をかきながら手を上げているような、上げてないような。お父さん、使わない？めったに使わない。黒部のほうの方ですか。

参加者3 いいえ、呉東に住んでますけど。ただ、これは私ごとですが、呉東には大きな川、黒部川がございますね。だから、言葉も川によってまたなにか変化があるんじゃないかとぼくは思うんです。それともう一つは、呉東のほうはわりあい雪が多いもんですから、雪の中で閉鎖されるものだから、その土地だけで通用する言葉もあると思うんですけど、チャは、ぼく、ちょっと聞いたことございません。

真田 私は、このチャはまさに富山県人の精神風土に対応する表現だと思っているんです。たとえば、「やっぱりラチャカンワ」と言ったときは、まだ個人的な感想なんですね。でも、「ラチャカンチャ」と言ったら、既定のこととして表すんですね。ですから、「世の中っちゃそういうもんやチャ」といった諦観。これなど、非常に浄土真宗的なというか、個人の意思を超えたところに客観的な畏敬すべき存在があるというふうな気持ちにぴったり対応する表現だと思っているんですね。たとえば、「でかいと雪積もって来れんがやチャ」と言ったら、はっきり来られないということを言うわけですね。「来れんがやワ」と言ったら、来るかもしれない。チャと言った瞬間、もうほかを許さない。まさに他力本願ですね。(笑)

司会 これは富山の人間じゃないとこの感覚的なものは分らんかもしれんチャ(笑)。

真田 しれんワじゃなく。

司会 しれんワというと、分らんかもしれんけれども、分かるかもしれんと。でも、分らんチャと言えば、かなり言い切ってしまうことに。

真田 既定の事項。もう決まっちゃってしまっているということになりますね。

司会 なるほど。これはちなみに奈良県の御二人には分かりますか。

中井 いや、もう、な、二人で合掌させていただこうと(笑)。

大西 もう帰るチャと。

司会 いやいや、まだ帰らんといてください。あと、これはどの辺まで関係があるのか分かりませんが、兄弟とか、さっきのカーカとかオトトなどに関係があるものなんですが、アンマ、オッジャ、アンネ、それから質問で「私は石動で生まれました。小さいころ、オタータと呼ばれました。家の格によって、タータ、ターボなど、呼ばれ方が違います。兄などは何と呼ばれていたのでしょうか」。小矢部にお住まいの80代の女性の方でございますね。

真田 タータ、ターボって未成人の長女ですよ。未成人の長男は五箇山でいうとタン、タンチ、ボン、ボンチなどでした。タータ、ターボというのは上位の格の家の長女で、下位の格の家の長女は、五箇山ではベー、ベーサでした。

司会 長男のアンマ、次男のオッジャというのは富山県内全般なんですか。

真田 少しずつかたちは変わっていますが、成人した長男ではアンマ、アンサ、アニキ、次男ではオッジャ、オッサ、オジ、いろいろありますけど、富山県では全般的にあるのではないのでしょうか。

司会 全国的ものではどうなんですか。

真田 全国？

司会 全国的な、例えば長男のことをほかに。

真田 そのような、長男と次男以下を区別して表現するのは、東北、北陸、出雲といった日本海側ラインですね。ほかの地域では、兄と言ったら自分のお兄さんであって、長男

ではないはずです。奈良もそうでしょう。

中井 そうです。

真田 アンマは家で一人しかいないのです。ふつう標準語では三男から次男に向かって「兄ちゃん」と言えるのですが、富山ではそれが言えないんです。アンマは一人しかいないわけで。

司会 アンマと言えば。

真田 そう、長男だけです。

司会 一人だけ。

中井 だから、やっぱり本家、分家関係とかは厳しいんですね。そういう家格の関係は、関西は余りないですね。本分家関係が厳しいのは東日本的ですね。関西は商売人ばかりですので、あるときは大金持ちになって、あるときは貧乏。浮き沈みが当たり前の社会ですよ。だから、そういう固定した秩序が形成されにくい。北陸はわりと農村社会を基盤にしているので、あんまり浮き沈みがなくて、家格の固定とかもあって、長男に対する特別の意識というのがあるんでしょうね。それと、近代以降になってから変わってきていることもあるかもしれませんね。近代になって、少し武家社会の感覚が入ってくるんです。長男というものに対する特別の感覚が入ってくるというのもあって、そこでも再生産がされたのかもしれませんがね。

司会 今アンマの話が出たついでに、東北、北陸、出雲地方と真田先生がおっしゃいましたけれど、この日本海側のラインは何かあるんですか。

真田 今日の最初にお話のあった東西の差ですよ。東西の差の本質は、やっぱり出雲から東北、北陸だと思います。それと瀬戸内との対立こそが私は本当の東西の差だと思っているんですね。いわゆる東西方言境界線というのは、もちろん日本アルプスといった山脈で、そこで分かれるんですけども、その違いはほとんどが中世以降の変化によるものなので、本質なものではないのではないかと思っています。ですから、そういう意味では出雲はどちらかという東側に属すると。それは、日本海側と太平洋側と言ってもいいかもしれませんが、東西よりもそちらのほうが本質的な差なのではないかと私は考えるんですが、その点はいかがでしょう。

司会 この話を始めると一時間とかじゃ無理なんでしょうね。上代の、つまり、だいぶ古代の話になっちゃうわけですね。

大西 そうですね。だからこそ、今真田先生がおっしゃったような、日本海側と太平洋側との対立とか、それから、東西の対立。この対立関係が見せるものというものは、何か背景に大きなことがあるはずなんですね。それをどうやって追究していくのか。これを感覚的にあっちが正しい、こっちが正しいというかたちで言っていたら、全然議論にならないわけで、これをいかにしてきちんと整理して、科学的に^{そじょう}俎上にのせて説明していくかということが、恐らく我々方言研究者に課せられている大きな課題なんだろうと思

いますので、ここでの議論をしたところで、恐らくしょうがないだろうというふうに理解しています。

司会 あと、確か中井先生が持っておられる質問票の中に、富山というのは北前船の寄港地でもあり、それから、越中富山の薬売り、これはもちろん江戸時代からの話ですけども、によって他府県との交流がよその県以上に、陸上、海上ともに盛んだったので、もっと言葉の交流はあったんじゃないかというような御意見の方もいらっしまったんじゃないかと思うんですが、それはどうなんですか。

中井 まず、北前船ですよ。北前船は北のほうから最終的に関西へ物資を運ぶわけですけども、東の米とか、また、蝦夷地の昆布とかを運んでくるわけです。私は言葉の伝播というのは、中心地とか、都市とか、そういうところの言葉は入るけれども、蝦夷地の言葉が、例えば北海道の特定の方言が大阪で広がるということは、例外を除いてないと。大都会はカッコいいんですよ。いいものがあるって、おいしいものがあるって、皆さんもときどき町に行きたくなりませんか。町へ行きますと毎日お祭りですよ。田舎は年に数えるほどしか祭りがありませんが、大阪は毎日お祭りなわけです。いつ行ってもお祭りに会える。いつでもおいしいものが食べられるわけです。いいものが集まってくる。農村で餓死する人が出ても、都会で餓死する人は出ないわけです。富といろいろなものが集まってくる場所ですよ。そういうふうなところの言葉というのは広がります。「あ、あの言葉カッコいい。おしゃれやから、上品だから、使おう。あの言葉を使うと、なんかお金持ちはみたいや。なんかこの商品はどうもいい商品みたいや。じゃあ、使おう」というふうに広がっていきますけれども、逆は余りないと思うんですよ。そういうふうに考えますと、北前船が上方の言葉を持ってきたということは考えられますね。ダイレクトに。けれども、逆のこのルートで地方の言葉が大阪に入るというのは、例外を除くと、ぼくはないというふうに。それと、薬売りさんも、どうでしょうかね。実は私の母方の実家というか、大和の薬売りなんです。なかなか儲かるみたいですよ。母親の実家はけっこう金持ちやなと思っていました。薬は儲かるねんと子どものころから思っていましたけどもね。子どものころ、富山の薬売り、あっ、うちとライバルやと思ってたんですけども、こっちへ来てみて大違いです。規模が全然違うわけです。多分薬売りさんが向こうに行って、富山の方言丸出しでは商売できないんじゃないんでしょうかね。やはり共通語じゃないけれども、全国どこへ行っても通用するような言葉に変えてお話をされると思うんです。ですから、薬売りの人が、これまた例外を除いて、方言を広げることは私はないと。逆に持って帰ってこられることがあるかもしれないですね。ですから、薬売りの人が方言を運ぶ媒体になったというようなことは、私は余りないんじゃないかと思えますけれどもね。私の母親も全国の方言を使うようなことはできませんしね。母親の実家も大和の方言しかしゃべれませんが、そのように思えますけれどもね。

司会 確かに今のテレビやラジオがないときに、まさに都でのやりもの、やはり言葉を

持ってくる媒体としては、船や陸上の薬売りは有効でも、その逆はやはりなかなかないということですね。

中井 そうですね。だから、高岡なんかは関西とけっこうダイレクトにつながった大きな商家があるわけです。それはやっぱり背景に大阪のあきんど、大西さんみたいなのがいるわけですので、これがおって、これが大阪の言葉で商売すると、なんやええもん売ってるのちがうかみたいなことを周囲は思うわけです。そういうような気分が言葉を広げていくというか、そういうことがあると思うんです。

真田 上等、上品なということで広がることもあるけれど、逆に都会こそ悪の魅力というか、下品だから、おもしろいから広がっていく側面もあるので、特にいつの時代にも若者はそうですね。大阪弁がなぜ広がるかという、やはりそれは新奇を求める心理というか、自分たちのレパートリーに欠如している俗的な遊びの部分、そういう魅力があるからこそだと思っただけですね。例えば東京のスッパイ、東京ではスッパイというのは俗語だよ、とよく徳川宗賢先生が言っておられましたが、スッパイとか、ソレデサーなどというのが若者に全国的に広がっていくのは、それが東京の標準ではなく、カジュアルな俗的なものだからだという、そういうあたりにあるのだと思います。

司会 話はとびますが、外国の話なんですけれども、ほかの国にも方言はありますかというやつ。それはありますよね。

真田 もちろんです。例えば、先ほどの言語地図から歴史を読み取っていくという言語地理学も、もともとフランスの方言研究から始まったわけですし。ただ、方言というときにはレベルが微妙ですね。例えばお隣の韓国だと、方言と言ったとたんに地域性が強く出てくるとか、あるいはインドだと階層性が非常に出てくるとか、中国だと、方言と言ったら、中国の中での華語以外の言語をも指しますね。方言のないところはないわけで、日本だけがものすごくたくさん方言があるということではなくて、世界中にあるのです。中国だって、上海の言葉と北京の言葉とはほとんど通じないわけで、方言はもちろん世界中にあるわけです。

司会 文法が基本的に同じであれば、例えば日本語と朝鮮語は方言の範囲内と考えていいかというすごい質問も来ているんですが。

真田 系統が同じものをすべて方言とするわけではありません。そんなことを言えばヨーロッパの諸言語は全部方言ですよ。問題はその上に正書法を伴った標準語がかぶさっているかどうかなんです。日本では沖縄まで含めて日本標準語がかぶさっていますから、沖縄語を沖縄方言とも言うわけです。ヨーロッパの場合、例えばフランスとイタリアでは方言同士では皆通じるんですけど、違いはその上に正書法を伴ったフランス標準語がかぶさっているかイタリア標準語がかぶさっているかによって言語が違おうとするわけですね。

司会 今の場合の日本語と韓国語はかぶさってはいない……。

大西 基本的には韓国語と日本語は方言関係とは言いません。系統が明らかに違うということなんですね。

司会 文法が同じであっても、そこまで一緒だということは言えないと。

真田 方言か言語かの判定は一方では非常に政治的、文化的なものでもあるわけですよ。

司会 残り時間の方もそんなにたくさんはないんですけど、私個人も含めて、それから、質問の中にいくつかあったんですけども、皆さんも多分聞きたいと思うんですが、今メディアがこれだけ発達して、交通網も発達しております。さっき中井先生もおっしゃった、何でしたっけ、一つの線で、年齢、10代から80代までの。

中井 グロットグラム。

司会 グロットグラム。ああいったものを今後取り続けていけば、どうなるのか分かりませんが、ズバリ、あと100年後、22世紀初頭に日本という国に方言というものはいくら存在していると思われますでしょうか。50年後というのは質問の中にあっただんですけども、50年後だったら、まだあるかもしれないなと思ったものですから、100年という単位でとらえさせていたいただきたいんですが。

大西 想像の域は出ませんが、質問の中にも、我々の研究所で作っている地図の中にカタツムリの地図なんていうものもあるんですね。その中に非常にたくさんの方言のかたちが出てきます。ちょっと誤解を招いてしまったのかなというのは、私の話は東西の境界の対立というものが時代の流れに影響されにくいんだという話をしたんです。しかし、すべての言語、方言に関する現象が同じように影響を受けないということではないんです。恐らくカタツムリの地図は、今描いたら、かつて描いたような言葉の細かな違いはもう出てこないと思います。ですから、そういう細かな違いというものはもう淘汰されたかたちになってしまうだろう。これは恐らく間違いないと思います。しかし、全然方言の違いがなくなるかということは、それはないだろうと思うんです。だから、東西対立的な非常にはっきりとした違いのもの、これはある程度生き残っていくんじゃないかなと思います。ある程度かたち、姿を変えることはあるかもしれませんが、生き残っていくんじゃないかな。しかし、残念ながら、非常に細かな違いというもの、もしかしたら呉東と呉西というもの、小さな違いと言ったら怒られるかもしれませんが、だんだん薄れてしまうということは可能性としては……。100年後ですよ。22世紀初頭という話ですよ。これはもしかしたら、どうでしょうかね、観察を続けていくべき対象ではないかというふうに思いました。

中井 どういった項目を調べていくかということだと思うんです。ぼく、今学生がカタツムリの方言調べると言うたら、やめろと言うと思うんです。そんなもん調べてどうすんねん。メダカを調べて言うたら、じゃあ、どうしてそれを調べるんだということですよ。国語研究所の『日本言語地図』、カタツムリやいろいろ調べられていますよね。当時はそれが意味があったと思うんです。研究というのは継続だけでも、今の時代に

合うというか、今の時代を読み取るために調査をすべきなんですよね。では、その調査項目が 100 年後に意味があるのかというのは、また難しいところですよ。ですから、一つは、継続的にやるべき項目というものを明確にしておくということ。それと、やはり時代に合ったものですよ。メダカって、非常にたくさんの方言集があるというのは有名なところ。確かに今富山で調べますと、ほとんどメダカなんです。それ以外出てこない。メメンジャコとか、その程度が回答されるだけです。なぜなくなっただけかということが面白いのですが、私たちの国語学という分野だけで考えれば、余り意味がないんです。けれども、例えば水田がどうなっているかとか、水環境がどうなったとか、そういった問題とリンクさせれば、意味のある研究になると思うんです。ですから、項目、調査対象の継続性ということと、時代に合ったものというのを両方見ていくことで、変わるものがあるのか、ないのかという、そういう時代に来ている。国語研究所の人を前に言うと悪いんですけども、ずっと同じ項目で盲目的にやるというのはもう終わりにしなきゃと思うんですが、いかがでしょうかね。

大西 そうでしょうね。これは『日本言語地図』にないんだけど、例えば、イネをかけてワラにするときのかける、あれ、何て言うんでしたっけ。イナカケと言うんでしたかね。

真田 ハサ。

大西 ハサね。あれなんかも地域差が非常にあるということは知られている。しかし、もしかしたら 100 年後、そんなことをもうどこでもやってないかもしれないという心配もあるわけです。そういう時代の流れに合わせるかたちで調査項目を選ぶ。当然のことだとぼくは思いますね。だけど、それがあったという事実はどこかで記録しておくということも、また一方で大事なことなんだろうと思います。

中井 それは例えばカッターシャツとワイシャツとかもそうですか。

大西 細かく言いたしたら何でもかんでも。

中井 いや、富山はカッターシャツと。違いましたっけ。ワイシャツですか。

司会 どっちを言われますか？

中井 どっちですか。

司会 はい、カッターシャツって今だに言ってる人。(会場の参加者に手を挙げてもらう)

中井 いないですか。

司会 はい、ワイシャツの方。

中井 ワイシャツですね。いや、私はずっとカッターシャツというのが標準語だと思って生きてきたもので。

大西 でも、どこにそういう違いがあるのかというのは、何でも分かっているわけじゃないわけですよ。ただ、気がついたときに何でも記録しておかないと、もうどこにもそういうものは残らないということになってしまうと思いますので、ぜひ中井先生、気が

ついたら記録を取っておいていただけるといいんじゃないかと思います。いかがでしょうか。

中井 何でも任してください（笑）。

司会 真田先生，100年後はどうですかね。

真田 私は日本が三つに分かれる，東京圏と関西圏と九州圏の三つくらいに分かれていくんじゃないかと。道州制を先取りするのが方言じゃないかと思っているんです。中世のキリシタンたちは，日本を関東，関西，九州の三つに分けているんですけど，そこへ戻っていくような気がしてきているんです。ただ，富山での中井先生にぜひ頑張ってほしいと思うのは，例えば『^{かぎゅう}蝸牛考』ですね。柳田国男の『蝸牛考』は富山県の方言分布から書き始めていて，そこから「方言周圏論」が発想されたわけですね。ですから，そういう意味で富山での方言研究が日本の方言研究の原点になって，また行ってほしいなという気がするんです。富山湾の魚がたくさん，いろんな種類があるように，富山県にはいろんな^{りげん}俚言がある。俚言の正倉院だとも言われているわけで，ぜひ頑張ってほしいと思います。

司会 柳田国男さんの『蝸牛考』って分かります？ お分かりにならない方のために，さっきも話に出てきました京都。都は東京であった時代よりも，京都が都であった，もしくは奈良方面，関西方面が都であった時代が一番長いわけですから，そこから同心円状に言葉が伝わった。今はメディアが一気に全国一斉に伝えますけれども，言葉の流行，文化の流行というのは，人々が足で歩いて広めていったというふうな考え方ですよ。実際に同心円状に言葉が広まっていっている。端っこへ行けば行くほど，つまり，青森とか鹿児島に行けば行くほど古い言葉が残っているというような考え方によるものなんです。実際にはかなりの確率で当たっているわけですよ。うんうんと言ってもらわないとね。私，何のための説明か。（笑）

真田 それから，もう一つ言いたかったんですが，五箇山のような山岳部でもナメクジとカタツムリとを言葉では区別しないのです。それは日本の周縁部と同じです。そこには，いわゆる水平分布と垂直分布の関係があるわけです。

司会 そうですね，垂直分布も忘れちゃいけませんわね。そういうような広がりを見せているんだというのが柳田国男さんの『蝸牛考』。蝸牛というのはカタツムリですね。『蝸牛考』という考え方でございます。そういった古い……。あれはいつごろのものでしたっけ。

真田 昭和の初期，昭和2年です。

司会 昭和初期のものなんですけれども，いまだに生きている。ただ，もちろんそれがすべてではない時代に，もうなっているということです。後は，方言をどう今後は，残していくのか，消えるに任せればいいのか。これも残り時間は少ないんですけども，聞いておきたいんですが，真田先生はどうお考えですか。いや，別に絶対残さんなんもん

じゃないだろうというような方もいらっしゃるでしょう、放っておきやいいんじゃないのという人もいるだろうし。

真田 難しい質問ですね。結局、方言というのは最終的には個人間の言語だと思うのです。英語でダイアレクトというのは距離をもった言葉という意味ですね。ですから、それは残しておくべきかどうかといった存在ではなく、自分自身を表現する、個性を出すために当然必要なものであるわけですね。他人がそれを残すとか残さないとか、そんなこと言える立場ではないのではないかと、とも考えているのです。

司会 中井先生。

中井 私は自分の研究の対象がなくなると困りますからね(笑)、残したい。特にダヤイとシンドイのような方言でしか言い表せない心に訴えかける部分の方言というのは是非残してほしい。残らないと深い意味での心のつながりが切れてしまう気がします。ですから、恩師にたてつくわけではありませんが、私は是非とも残してほしいというふうに思ってますけどね。おばあちゃん、おじいちゃんに頑張してほしいというふうに思っております。

司会 はい、確かにシンドとダアイを疲れたで言い換えはできませんもんね。

中井 そうだと思うんですね。

司会 大西先生。

大西 いや、残すに越したことはないと言ったら非常に消極的かもしれませんが、ただ、これはかなり積極的に何か働きかけを行わないと残らないんです。つまり、大事です、大事ですと言うのは簡単なんです。残しましょう、残しましょうと言うのは簡単なんです。しかし、これは引き継がれていかないといけない。つまり、世代間でのコミュニケーションですね、これがない限りは絶対途絶えます。ですから、そこをどうやっていくのか。何らかの行政的な働きかけをもって、そこをバックアップするというようなことをやるのか、それとももっと草の根的な動き、働きかけを行っていくのか。これはおかみが言ってどうこうなるというものでもない。やはり何か草の根的に、共通の認識の上に立った上で積極的な運動を起こしていく。そういうことをやっぱり考えないといけない。実はそういう時期にかなり近づいてきている。いや、むしろそういう時期の中に入っているというところではないかと思えます。

司会 だって、90年代に入ってから、朝日新聞が1回取り上げたのが、関西や中京方面で方言が失われつつある。テレビ、ラジオの影響で標準語で話す子どもたちが増えてきている。関西弁のアクセントさえ消えている子どもがいるという衝撃的な記事を朝日新聞で読んだことがあるんですけども、それが今後どうなるやら、もちろん分かりませんが、果たして消えていくものなら、消えてしまえばいいのか、いや、そうじゃなくて、残る力を、方言というものがまだパワーを持っているのか。それこそ100年後に委ねてしまえば楽なんですけれども、どうしていくか、皆さんで考えていただいてもいいし、

自分自身で思って、ずっとベタベタの富山弁をしゃべり続けていただいてもいいし、それはもう様々だと思いますね。これは結論は多分出ないと思いますので、ぜひ皆さんのお持ち帰りの今日の宿題にさせていただければ幸いです。3人の先生方、今日はどうもありがとうございました。また思うことがあれば、私の番組でも引き受けますので、よろしくリクエストでも、それから、メールでも、メッセージでも、どんなかたちでも結構でございますので、お寄せいただければと思います。今日は長時間にわたりましてお付き合いくださいまして、本当に皆さん、どうもありがとうございました。

<終了>